

# しのはらの風 20-2号

小淵沢町篠原区情報紙  
 発行人：区長 松井 皎  
 編集：藤代 富美男

## 優勝旗はどこに！？ 分館対抗球技大会が行われました

6月1日(日)に分館対抗球技大会が行われました。篠原区各チーム(ママさんバレー、ゲートボール、グランドゴルフ)は閉会式で名前を呼ばれることはありませんでした。でもまあいいじゃないですか、みんな大汗をかいて頑張りました。大事なことは参加して交流を深めることだと思います。でも優勝旗、かっこよかったな～！これからは他の2種目(ソフトボール、卓球)にも参加できるようにしたいですね。更にチーム内の交流を深める方法についても検討したいですね。選手の皆さんお疲れ様でした。

## お疲れ様でした

6月8日(日)環境美化運動に参加いただきましてありがとうございました。別荘区民の方、未加入の方も一緒にみんなの景観(環境)創りに汗を流しました。この日だけでなくいつもきれいにしていきたいですね。

## 当区の現況・・・もうチョット突っ込んで

前号で当区の現況をお知らせしましたが今回は遡って48年前からの推移と現在の各区の世帯数と人口についてまとめてみました。皆さんはこの数字に何を感じますか。

(篠原区の世帯数と人口の推移)

	昭和35年	昭和45年	昭和55年	昭和63年	平成8年	平成12年	平成17年
世帯数	54	53	51	86	140	180	240
人口	207	211	175	267	399	450	548

(平成20年6月1日現在小淵沢町内行政区別世帯数と人口)

	宮久保	高野	久保	岩窪	小淵	尾根	本町
世帯数	175	152	150	90	105	255	282
人口	479	440	375	265	255	602	667
世帯当人数	2.7371	2.8947	2.5	2.9444	2.4286	2.3608	2.3652
	大東豊	上笹尾	下笹尾	松向	女取	篠原	計
世帯数	235	363	99	165	108	285	2464
人口	549	897	292	465	238	624	6148
世帯当人数	2.3362	2.4711	2.9495	2.8182	2.2037	2.1895	2.4951

\*昭和35年の世帯当人数が3.8333に対して現在は2.1895人です。また他区に比べても低い数値になっています。区内を見てもリタイアした夫婦の世帯が増えて高齢化が急激に進んでい

るようです。この傾向にあわせた対策が必要とされてくるのではないのでしょうか。それ故子供たちにも手厚い対策が求められるのかもしれませんが。

ご意見がありましたら各組長または藤代（36-3483）まで

## ＜景観（環境）はみんなで創る財産です＞

前号に続いて「こぶちさわ昔ばなし」から転載します。今回は4年前に95歳で亡くなられた渡辺ふじさんの文章です。私達の篠原はこのような先達のご苦勞の上に成り立っています。入植した皆さんが創った財産を今の私達が消費するだけでいいのでしょうか。少々長いですが一挙に全文掲載します。（句読点等原文のままです）

### 【入植当時の思い出の記】

篠原 渡辺 ふじ

冬枯れの耕地の一角に立ち、冷たく澄んだ空の下に、その偉大な白いき然とした姿を見せる南アルプスの山々を眺めました。ハヶ岳おろしの厳しい風が、この小さな体を容赦なく吹きつける。幾度聞いて来たであろうか、松の木々の叫びを、頭の中を去来する数々の思い出、私たちの半生が目前に広がるこの耕地にかけられたものでした。

昭和二十年五月戦火に追われ、一家八人の大家族は着のみ着のままの状態、一人の知人もない小淵沢に疎開しました。偶然にお会いした、今は故人となられた岩窪の藤原由平さん御夫妻のお世話になることになりました。縁もゆかりもない私達一家を暖かく迎えて下さった藤原さん、そして部落の方々、自然の美しさに恵まれ、そして人情の豊かな地に住む事が出来たことを、家族みんなで心から感謝しようこびあいました。

疎開三ヵ月にして終戦をむかえようとは。家族と話し合いをした事も幾度か、東京には帰る家もなく、職もない。此の地で生きよう、残る人生を農業にかけて見ようと決めました。五十才の声を聞こうという主人の決意は固く、私達はどんな困難が待っているとも知らず、篠原を永住の地として、土に生きる事に致しました。

二十年秋、原始林さながらの淋しい此の地に、耕地の立木で、自分達の手で掘立小屋の小さな家を造りました。僅かな家財道具を運び乏しい貯金、すべてが余りにも貧しく、心細い第一歩でした。八人もの大家族がそんな中で生きて行かなければなりません。長女、次女を除いた四人の子供達は教育があります。一日の容赦も許されません。こんな状態の中で入植の第一歩を踏みました。

入植地として選んだ此の地は上笹尾の区有林で、標高九百米すぐ上を小海線の線路が曲がりくねって続き、日に何回であったろうか、八ツの雄大な裾野を煙を吐きながらのんびり走る姿はあまりにもものどかで、ふと別世界に居る様な錯覚にとらわれ、恐ろしかった空襲等夢の様な心地でした。

最初私達は思いもよらぬ問題にぶつかりました。生活に一番大切な水がないのです。掘れば出ると簡単に考えていたのが誤りでした。掘り進むと必ず大きな岩にぶつかり石屋さんを頼む事も幾度だったか。費用も思いのほかで家の周りに、畑の中に、といくつも掘りましたが、そ

れは総て徒労に終わり、水を探して山の中を幾日も歩きまわりました。やっと見つけた湿地、それから又穴掘りが始まりました。自分の背丈位も掘ったでしょうか。暗い林が疲れきった体に疲労の度を増す。そんな日の翌朝、目覚めと共に見に行きました。小鳥の啼りが、それは明るく聞かれる朝でした。薄暗い林の中の穴には五十粒（糶かと思われる一藤代注）位の水がたまっているではありませんか。そっと汲みあげて見ました。冷たくなんと、きれいな水なんだろう。ふとこみあげる嬉しさと感動で胸が一杯になりました。

一日は水汲みから始まります。夜明けと共に三百米程はなれた林の中へ、両肩へくいこむ天ビンの重さに耐えながら二往復、そして昼食時に二回と、一日の労働を終え、星を仰ぎながらよろめく足を一步一步踏みしめ運ぶ辛さよく生きて来たものと我ながら驚きます。無経験な重労働の開墾と粗末な食事の日々、鍬を振り切り株を掘る。そして整地と、力つきて倒れた事も幾度だったでしょうか。

僅かな配給は通学する子供達のお弁当にとまわりました。でも自然はしばしば私達の飢えを凌いでくれました。野草のワラビが主食になった日もありました。木の実、キノコ等、そして燃料がふんだんに使える事は幸でした。

冬の厳しさを私達は知りませんでした。屋根裏から吹き込む粉雪に、一家が身を寄せ合い、布団をかぶってふるえながら夜を明かした事も幾度か、ようやく畑が出来ました。たとえ一坪でも耕地を拓けたかったです。

寒さと土でヒビ割れ、血がにじみ、人間のものとは思えぬ様な手足、こんな状態の中で、どれほど春の訪れを待った事か。それが昨日の事の様に思い出されます。

入植当時から主人は豊富な野草を利用し乳牛を飼育したいと考えていました。そのため寸暇をさいては牧場視察にあちこち行きました。道に迷って真夜中に漸く帰り着いた事もありました。苦しい中でやっと用意した子牛四頭分の前金として支払ったお金も、進駐軍の食糧として家畜は接収されたとのデマが流され、又戦争のため家畜が減って入手困難となり、その夢も破れ、主人の落胆はこのほかでした。

開墾、根株掘りと骨身をけずる思いで努力した結果、二年目には五十アールの畑が出来ました。馬鈴薯、豆類、粟、ソバ、トウモロコシ等、僅かでしたが、その収穫物を手にした時の喜びは一入でした。掘りたての玉子の様なジャガイモを初めて口にした時の味は終生忘れる事が出来ません。ジャガ芋を主食する日も随分続きました。

高原の澄んだ空気と太陽をたっぷり吸収したナス、トマト、キュウリ、キャベツ等野菜が毎日の食卓を賑わしてくれる様になりました。その年のお正月には手作りの粟で、お餅を搗き、家族揃ってささやかながら楽しい新年を迎えることができました。お正月も三ヶ日休んだのみで、又畑造りが始まりました。そんな事が何年続いたことでしょうか。

娘達も次々と結婚しましたが、親として何一つ支度らしいこともしてやれず、辛く悲しい思いを致しました。私達は心から娘の「幸福を願いどんな逆境にあっても強く豊かな心を持ってほしい」と。そんな言葉を贈ることしか出来ませんでした。幸い嫁いだ娘達も、それぞれ一生懸命に家庭を守り、明るく心豊かに過ごしてくれる事は何よりのよろこびです。

畑は年毎に面積を拡げ、トウモロコシ畑の中に立ち、緑のささやきと波打つ穂先を見るのも何と心楽しく、葉ずれの音は、どんな名曲を聞くより私には素晴らしいものに思えました。耕地面積が拡がるにつれ、次々と新たな問題が起きました。有機質肥料の必要から自己資金で漸く買入れた役牛と馬の飼料が又仕事を増やしました。四時起床、棒道近くまで馬車で登り、三十把程の青草を刈り、飼料と約半分は堆肥にまわした。又、ホップの試験栽培もやって見ましたが、消毒の水不足とで思うような収獲が得られず、断念するほかはありませんでした。

廿五年には待望の乳牛が政府資金で導入されましたがこれも又搾乳出荷で苦勞しました。長坂の収乳所へ毎朝七時の汽車で運び、搾乳、冷却、運搬と家中で一頭の牛にかからなければならぬ状態は、立地条件と、基礎の上にたたない計画の無理、労力と時間の浪費等、経営のむづかしさを痛い程教えられました。

二十七年暮待望の粗末乍らも本建築の家に住む事が出来ました。今までの努力がやっと実ったのも束の間、二十八年、九年の冷害凍霜害で私達はすべてを失いました。折角手に入れた乳牛、十羽の鶏まで手放さざるを得ませんでした。又入植当初の振り出しに戻ったのです。こんな経験がかえって私達に強い意志と、土作物にかける情熱を増すことになりました。再出発です。

入植者は、それぞれ筆舌につくせぬ苦難の道を歩んで今日に到っています。入植当時約九十戸の引揚者、戦災者の人達が家族を抱え、食糧と戦いながらどうにか生きてきましたが、現在の篠原は約半数の四十七戸になりました。開拓行政も変わり、本村と同じ待遇を受けられる様になりました。時の流れはあまりにも早く、三十二年の月日が過ぎました。篠原の世代も変わりました。

社会の目まぐるしい変化に、それぞれ進む道は違っても背後のハツを、目前に南アルプスの山々と、この美しい自然の中にある篠原が心の安らぎの地、よき故郷になってほしいと願ってやみません。

篠原の里も春の訪れと共に、大地が力強く息づき、周囲の山々も一斉に芽吹き、この冬枯れの耕地も緑にかわる。入植と同時に植えた梅や桃も太く高々と成長し、その枝を一ぱいに広げている。見事な花を、そして芳香を放つ桃源郷さながらの、素晴らしい春がそこまで来ています。躍動の春が、私の心は残された人生をこの篠原にあってより豊かにと願っております。

昭和四十六年春から苦勞を共に助け合い、励まし合ってやって来た篠原の元老四人が次々と世を去られました。そして十二月三十一日の朝最後の締めくくりをする様に、主人も亡くなりました。何か不思議の思いが致します。

ハツのふところに眠る多くのみ霊よ、安らかにと心から御冥福をお祈り致します。

年と共に記憶もうすれ、忙しい生活の中で書きとめた二十五冊の日記帳を頼りに書いて見ました。

- \* 身近な情報をお知らせください。36-3483 藤代まで
- \* 気楽に読みやすく、親しめるようにと敢えてくだけた文章にしています。ご意見をください。
- \* 今号は「こぶちさわ昔ばなし」に頁を割きました。次号からまた話題豊富にする予定です。